健康的な生活のあり方と多文化理解

—学術研究都市で実施したワークショップを通して—

山下正*[1]，樫田美雄[1]，相原洋子[1]，山本昭宏[2]
１神戸市看護大学，２神戸市外国語大学
*E-mail:tadashi_y_kobe@yahoo.co.jp

A healthy life and multicultural-understanding through a workshop held in a college town

YAMASHITA Tadashi[1], KASHIDA Yoshio[1], AIHARA Yoko[1], YAMAMOTO Akihiro[2]
1 Kobe City College of Nursing, 2 Kobe City University of Foreign Studies
Key Words: Multicultural-understanding, Study abroad student, workshop

はじめに

現在、我が国の高齢化は急速に進んでおり、それに伴い若年層（10～20 歳代）の総人口に占める割合は低下している（内閣府，2016）。一方、この若年層の留学生は増加傾向にあり、日本の留学生数は 239,287 人（平成 27 年 5 月）、前年比 14.8%増の状況である。出身地域別では、アジア圏からの留学生が 92.7%と圧倒的な割合を占めている（日本学生支援機構，2016）。その背景には、東南アジアの中でも高い日本の教育水準の人気や海外の日系企業への就職志向、日本文化の人気などがあげられる。そのため、健康的な社会を目指すには、人口が増えている高齢者や留学生の生活環境を整えていくことが日本社会全体として求められる。

しかし、近年、地域在住の高齢者においては高齢者の社会的孤立の問題（総務省，2013）、留学生においては食生活の乱れ（高濱 他，2013）、さらに日本の大学生においては朝食の欠食（若松，2012）や孤食を肯定する意識の存在（飯田，2001）など食生活の乱れが存在すると言われている。高齢者や留学生、大学生など、世代や文化背景は異なっても、お互いに支え合い理解し合う意識が、共に生活をする上では重要で、先にあげた社会・健康問題を軽減するきっかけになると考えられる。個の食生活を規定づける重要な要素の一つが食文化であり、食文化に関する交流を通して、互いに理解し合うことができる。

渡辺(渡辺, 1995)は、異文化接触(culture contact/cultural contact, international contact）とは、ある程度の文化化を経た人が、他の文化集団やその成員と持つ相互作用と述べ（Segall, 1990;Brislin, 1994)、泉水ら（泉水, 2012）は異文化に接触することは、自他の文化に関する評価への影響を与え、このことは自他の行動に関する影響を与えるとともに異文化に対する積極的な態度を形成することにつながると述べている。つまり、異文化を持つ者同士、国籍が異なる者同士、同じ国籍でも培われた文化が異なる多世代間において、互いに理解をし合うためには、歩み寄り、理解しようとする行動が重要である。また、佐野ら（佐野, 1995）は、異文化理解においては、品物や行動に関する文化情報の不足以上に、考え方や感じ方の違いが異文化間の相互理解を難しくすると述べている。つまり、異文化間の価値観を互いに理解するためには、その考え方や感じ方を共有する必要があり、話し合いや時間を共に共有する機会が必要なのである。

しかし、そのような交流の機会に関する報告はこれまでにほとんどない。特に、同地域に居住する高齢者、大学生、留学生が共に食事をし、それに関する議論を行ったとする報告は見当たらない。そこで、本研究では、同地域に居住・通勤・通学している高齢者、学生、留学生がそれぞれの文化的価値観を共有することで、多世代が集う研究学園都市地域における健康的な生活のあり方に関する示唆を得ることを目的とした。

方法

1)研究フィールドと対象者

本研究フィールドのＡ市Ｂ区は、1980 年に住宅等の整備がされたニュータウンであり、Ａ市の中で最も近年になって開発された地区である。このため区の高齢化率は、全国平均 23%であるのに対し 18.3%(2010 年）と低い。しかし 2025 年には高齢化率は 30%を越えるとの推計があり、他区と比較しても高齢化進展は急速である。またＢ区は学術都市を有し、学術都市地区には 8 つの高等教育機関が設置されており、日中の流入人口で若者が占める割合は高く、多様な世代が交流できる機会を持っている。対象者は、Ｂ区近隣に居住する 65 歳以上住民と、Ｂ区の大学に在籍する学生で、本調査の趣旨を理解し協力の得られる人とした。

2)調査方法

調査は 2016 年 7 月に行われた。大学生、地域住民が参加するワークショップを開催した（表１)。ワークショップ名は、参加者が多世代に渡り、かつ国籍が異なる文化背景を持つものが参加したことから「多世代多文化共生型ワークショップ（以下、ワークショップ）とした。ワークショップでは 3 グループ（各グループ 6 人で構成）に分かれ、それぞれ「地域の固有性とグローバル化と料理」、「地域文化に則って多文化的健康を目指すことは可能か」、「多様性の尊重と食文化の維持は矛盾しないか」をテーマに意見交

換を行った。研究者がファシリテーターとなり、それぞれのテーマについて話し合い、その後全体に向けて意見交換した内容を報告発表した。なお、参加者の構成は、地域住民5名、大学生が9名（うち留学生1名）、大学院生（留学生）が1名、研究者が3名の計18名であった。

表1　ワークショップのタイムスケジュール

	内容	所要時間
1	ファシリテーターのスピーチ	15分間（各5分）
2	班別討論（その１）	35分間
3	全体向け報告（その１）	21分間（各5分報告，2分質疑）
4	班別討論（その2）	29分間
5	全体向け報告（その2）	15分間（各3分報告，2分質疑）
6	総括討論	5分間

3）分析方法

ワークショップで話し合われた内容は、ICレコーダーに録音し、ワークショップ後にそれを逐語録に起こした。分析方法は、会話全体の内容の類似する発言の削除、内容をより高次元の抽象レベルにまとめるためにMayring（Mayring 2000, 2004)が提唱した質的内容分析を採用した。テクストからコードを作成し、類似性からコード間のつながりの検討し、同じ意味の言い換えの削除を繰り返して、メインカテゴリーとして取りまとめを行った。コードは、コード数を計上した。

4)倫理

調査の趣旨説明は口頭ならびに文書で行った。協力者からは署名による同意を得た。本研究は、神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認日　2015年7月14日)。

結果

１．対象者の概要

参加者は、地域住民5名、大学生が9名（うち留学生1名）、大学院生（留学生）が1名、研究者が3名の計18名であった。年齢は、20代が9名、30代が2名、40代が2名、60代が5名であった（表2）。

表 2　グループメンバーの構成

グループ 「テーマ」	所属	年代
A 「地域の固有性と グローバル化と料理」	ファシリテーター（研究者）	40
	地域住民①	60
	大学生①	20
	地域住民②	60
	大学生②	20
	大学生③	20
B 「地域文化に則って多文化的 健康を目指すことは可能か」	ファシリテーター（研究者）	40
	大学生（留学生）	20
	地域住民③	60
	地域住民④	60
	大学生④	20
	大学生⑤	20
C 「多様性の尊重と食文化の 維持は矛盾しないか」	ファシリテーター（研究者）	30
	大学院生（留学生）	20
	大学生⑥	30
	地域住民⑤	60
	大学生⑦	20
	大学生⑧	20

２．ワークショップの分析結果

分析結果は次のようになった（表 3）。メインカテゴリーは『』、サブカテゴリーは「」、発言内容は斜体で示す。

1）『日本の食環境・文化の変化』は、「昔と比べての食べ方の変化」、「食材をいつでもどこでも購入できる時代」、「食事のバランスを大事にする日本人」、「日本の食事マナーと変化」から構成された。

・*昔は残しちゃいけないと思ってたけど、今じゃあその、無理して食べることはない。で好きなものだけ食べれば良いっていうのはあるね*
・*昔の食べ方とかなくなってしまって。なんか、時間、時代が変わったか*
・*僕らの時って、まあ、団塊の世代なんですね、っていうのは、もう食べ物がなくて、*

もう、あればすぐ食べたいっていう

- *日本人はすごく、なんていうか、バランスがいい食事をとると思いますので、特にロシア人やアメリカ人と比べると、全然。*
- *北海道のものとか、九州のものとかって、すぐ食べよう思ったら食べれるじゃない*

2) 『地域の食文化』は「地域によって食材の味や扱い方が違う」、「食を理解するための交流」、「地産地消」から構成された。

- *なかなか地産地消を考えるって難しい。うん、今もう、流通しすぎているんで*
- *タマネギとかでもね岡山のここやったら多いんやけどね。やっぱ淡路のと比べたら味が、だいぶ違うんですよ*
- *さっき言ったインスタントラーメン、関東風の味と関西風の味と違うってやつでしたね*
- *その地域の食材だけじゃなくて世界中の食材を組み合わせて、いろいろ体験出来るのが学園都市的食生活でそれを、その一部でも、フェアとかね*

3) 『留学生の食事とその思い』は、「留学生の日本食への対応」と「スローフード」から構成された。

- *（留学生は）けっこう嫌いな人多かったのに最近やったら納豆好き*
- *寿司ももちろんそうですけど生魚は（避けてる）*
- *（日本人は）ちょっと早めにクロワッサン食べる（食べてゆっくりする）のちょっとない*

4) 『若者の痩せ問題』は、「食事への関心の低下」、「大学生の欠食習慣」、「幼少期からの食育活動」から構成された。

- *ちゃんと食べなさいよっていうのを目指して、やってるんですよね。小学校のうちからっていうところでやっているんですけど*
- *忙しくて、学校とか、はい、行ったり。昼は抜き、晩ご飯はまあちょっと、なんか、外食とか*
- *最近なんか、どのサラリーマンたちですね、あと学生たちも職業も、あと、単純に毎日同じもの食べてると思います*
- *それ食べないっ忙しいから眠たいからって、食べれないから食べないっていう*
- *逆に僕はもう全部3食食べないと気が済まないんですけど、食べない。友達はもうほんとに、何でなんですかね。腹減ってないんだよって言って*

5）『生協活用の可能性』は、「生協食の多文化化」と「家で料理をしない大学生」から構成された。

・*ハラル食あの、豚肉、が入っていないとか、イスラム教の人でも安心して食べれる食材（を生協で扱っている）*
・*ベジタリアンの方とかは、タルタルソースをエビにかけて持ってったんよ。ほんで、あくる日朝、あの、きゅうりだけみじん切りしたキュウリだけ（持ってきた）*
・*家で料理しない男子とかがいっぱいいて、野菜食べなきゃいけないし、まあフルーツなんかも*

表 3　質的内容分析の結果

メインカテゴリー	サブカテゴリー	コード数
日本の食環境・文化の変化	昔と比べての食べ方の変化	13
	食材をいつでもどこでも購入できる時代	8
	食事のバランスを大事にする日本人	5
	日本の食事マナーと変化	4
地域の食文化	地域によって食材の味や扱い方が違う	16
	食を理解するための交流	4
	地産地消	2
留学生の食事とその思い	留学生の日本食への対応	11
	スローフード	2
若者の痩せ問題	食事への関心の低下	10
	幼少期からの食育活動	4
	大学生の欠食習慣	2
生協活用の可能性	生協食の多文化化	9
	家で料理をしない大学生	2

考察

本研究を通して、異なる文化背景をもつ者が一同に集い議論を行うことで、研究学術都市地域における健康的な生活のあり方に関する多くの示唆を得ることができた。

厚生労働省の調査では、高齢者は若い世代とのつながりを求めているが、多世代間の交流は希薄化している現状が報告されている（厚生労働省，2015）。今回、多文化つまり世代や国籍が異なる者が集い、互いに理解を進めるための多世代多文化共生型ワークショップを試みた結果、時代とともに移り変わる日本の食文化の変化や地域の食文化の特性について、高齢者と若い世代間で共有することができた。このことは、多世代間の

認識の違いが表出されただけではなく、急速に変化する日本の食文化のあり方や若者の考え方を受け止めようとする高齢者の思いを垣間見ることができ、価値観を共有するという点では意義があったと思われる。

次に研究学術都市地域における健康的な生活のあり方について考える。今回の試みは、先に述べたように高齢者と若者の交流を促進することができ、地域における世代間の絆を強め、高齢者の孤独化軽減のきっかけになり得ることが考えられた。また、留学生との交流を通して、留学生が日本文化に浸透しようとする留学生の日本での食生活の様子がみられ、その現状について国籍を問わず参加者全員で共有する機会となった。高濱ら（高濱 他，2013）は、留学生の食生活の成り立ちの要因の１つに社会的要因があると述べている。そのため、このような交流の機会を通して、留学生は自身の食文化を改めて見直すきっかけになるであろう。また、若松（若松，2012）は、食知識を増やしたいと思っている大学生は過半数いる一方で、朝食を自分で準備して食べるということは、大学生にとってかなりハードルが高い実態があることを報告している。現在の社会問題の１つである若者の痩せ問題の解決には、本ワークショップのような試みに加えて、大学側の食事提供の環境面についても検討する必要があろう。幸いにもＢ区は研究学術都市であり、そのような社会資源は多い。１つの案として、全国大学生活協同組合連合会の大学生協食堂の活用があげられる。大学生協食堂は、学生の健康な体づくりに貢献するための食育活動に特に重点をおいているため（全国大学生活協同組合連合会，2017）、昨今の大学生の健康課題を考慮した上で、大学生のための健康的な食事メニューの考案や食について話し合う機会の提供等が期待される。以上のことから、研究学術都市地域における健康的な生活のあり方とは、研究学術都市の特性を十分に活かし、同地域に居住する住民同士が互いの価値観を尊重していくことを住民一人一人が認識していくことと思われる。そのためには、多世代や多文化の価値観が同地域に共生するという認識を強く理解すること、互いの価値観を尊重していく姿勢、豊富な社会資源の活用、そして行動や話し合いを共にする時間や機会を積極的に設けることが住民一人一人に求められる。

結論

今回実施した多世代多文化共生型ワークショップを通して、多世代多文化間の価値観・考え方を共有することができ、研究学術都市地域における健康的な生活のあり方と多文化理解に関する多くの示唆を得ることができた。今後、本ワークショップの継続と、地域にある社会資源を活用した方法で、健康的な生活のあり方と多文化理解について継続的に検討していくことが重要であろう。

謝辞

本調査にあたり、参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、

平成 28 年度神戸研究学園都市交流推進協議会共同研究助成を受け実施しました。

文献

内閣府，第 1 章　高齢化の状況（第 1 節）
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/gaiyou/s1_1.html
（アクセス日：2017 年 5 月 18 日）
独立行政法人日本学生支援機構，平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/
（アクセス日：2017 年 5 月 18 日）
高齢者の社会的孤立の防止対策等に関する行政評価・監視．総務省．2013 年
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/000072551.html
（アクセス日：2017 年 5 月 18 日）
高濱愛，田中恭子．留学生の食生活と健康―留学生支援としての食育という課題―，ウェブマガジン『留学交流』，28(7)，2013.
若松法代．大学生の食生活実態と食育の課題，滋賀大学大学院教育学研究科論文集 15，2012.
飯田文子，高橋智子，川野亜紀，渡辺敦子，大越ひろ，三輪里子．大学生の食生活の意識について，日本食生活学会誌 12(2)，2001.
渡辺文夫．異文化接触の心理学．川島書店，p84-85，1995.
Segall，M.H.，Dasen，P.R.，Berry，J.W. and Poortinga，Y.H. Human behavior in global perspective. Pergamon Press，1990.
Brislin，R.W. and Cushner，K. Improving intercultural interactions. Sage.1994.
泉水清志，小池康生．異文化接触が異文化受容態度と友人関係に及ぼす影響，育英短期大学研究紀要　第 29 号，2012.
佐野正之，水落一朗，鈴木龍一．異文化理解のストラテジー―50 の文化的トピックを視点にして―，大修館書店，P73-75，1995.
Mayring，P. ‘Qualitative Content Analysis,’ Forum: Qualitative Social Research，1(2)，qualitative-research. net/fqs，2000.
Mayring，P. Qualitative Content Analysis,’ in U. Flick，E. v. Kardorff and I. Steinke (eds.)，A Companion to Qualitative Research. London: Sage. Pp.266-269，2004.
厚生労働省，平成 27 年版厚生労働白書，P144-145，
http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/（アクセス日:2017 年 12 月 19 日）
全国大学生活協同組合連合会，食堂事業，
http://www.univcoop.or.jp/service/food/index.html
（アクセス日：2017 年 5 月 18 日）

＊＊

【編集後記】

『現象と秩序』第 7 号をお届けします．巻頭の特集『多文化異文化交流と学園都市的食生活』は，神戸市看護大学教員，神戸市外国語大学教員，および，神戸市外国語大学消費生活協同組合職員が共同で申請した研究経費に基づいてなされた研究をベースにしたものです．高齢化が進行しつつある，神戸市郊外のニュータウンという事情や，留学生が比較的多い外語大と，一人もいない看護大という事情に基づいた研究がなされていますが，その一方で，全国の地域や大学と同時代的状況を共有している面もあります．そういう眼で見て頂ければ幸いです．

特集以外の論説では，まず，飯田論文は、幼児に関するエスノメソドロジー・会話分析研究の成果です．幼児と母と祖母の 3 者間で，カテゴリーに関する理解の摺り合わせが複雑に高度に達成されていることが明白にわかる論考になっています．

桃井論文も，画像を大量に用いた授業研究になっています．また，アクティブ・ラーニング研究にもなっていて，その点では，特集の第一論文とも関連しています．

篠島ほか論文は，ALS 療養者のさまざまな工夫を扱った論文です．足の指で絵を描くにあたって，かつて建築関係の仕事で使っていた製図ソフトが流用されています．経路依存性研究としての質を持っているように思われます．

藤野ほか論文は，女子車椅子バスケットボール研究が扱われています．関西に 1 チームしか女子チームがない，ということで，通常は強化の困難が帰結されると思われるのに，インタビューによれば，国際大会準備として男子チームに混じって練習することが有効だ，という話になっています．一種の思わざる効果研究として成立していると思います．

次号には、特集：『社会学を基盤にした（ソーシャルワーク系）新専門職の可能性』が掲載される見込みです．ご期待ください．　(Y.K.)

＊＊

『現象と秩序』編集委員会（2017 年度）

編集委員：樫田美雄(神戸市看護大学)・中塚朋子(就実大学)・堀田裕子(愛知学泉大学)

編集幹事：坂根杏奈　(神戸市外国語大学)・平田菜津子　(神戸市外国語大学)

編集協力・印刷協力：村中淑子　(桃山学院大学)

『現象と秩序』第 7 号

2017 年　10 月 31 日発行

発行所　〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学　樫田研究室内　現象と秩序企画編集室

電話・FAX）078-794-8074（樫田研）,e-mail:　kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN　：2188-9848

ONLINE ISSN　：2188-9856

http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html